



2  
は

489

の肖像の大部分は安藤が描いたので吾は肖像  
 画家として相違なきとすした。大まかに  
 無いが<sup>左に在る</sup>諷刺の洋画史には~~逆~~逆すべからざる  
 名である。

板衝くくは人形が面白く、~~粗~~粗<sup>設</sup>落らしく  
 見えと寧は細心な多葉家で、人と端の煙の  
 捲く才辯と持つてゐた。新聞社との関係しらの  
 心世術のうで徳富や神比奈の巧みに入つ  
 た。新聞社に~~関係~~関係し<sup>た</sup>たの心世術のうで、米  
 徳が~~心世術~~心世術以外の画家として国民新聞の

板衝に座すも且つ洋画家として自薦して容  
 量と有り、又幾何もなく神比奈の~~入~~入つて居  
 る新聞社へ移した。

ドウリや拍子の安藤を抱一と知らるるが右の  
 ちと見え、二人は始終一筋の筋んで居りて  
 一時白龍鮑の間柄であつた。が、安藤は石  
 無徳なる森落らしく見え、寧は兼もあつて端め  
 々々りもあつて~~世~~世に巧みであつたから、抱  
 一が~~抱~~抱けの~~抱~~抱うで相違なきとすしたと  
 わるるは~~抱~~抱けの愛慕と畫のうで終つた~~抱~~抱の~~抱~~抱

文藝春秋は

も早く決着したものに及して、高島としてこそ  
 飾りたした足跡と残さるものたちが社会的に  
 加ふる門戸と成つてゐた。抱一が最後まで  
 世治に与つたのは安藤で、此れも足跡と成つて  
 深泊つてゐたのと安藤は殆ど与つては能く居  
 倒と成つた。悪友仲間ではあつたが、  
 に世治として大善友とあつた。

おへミアツ・クラブ

長谷川は或や安藤と能く一語を交つた。が、  
 此は少しも欲の及つたし、敵と品外に正と  
 は交はるゝが一種の依拠厚かつた悪友と成つ  
 るものた。抱一に限らず此と成つても主眼は自  
 づから限交があつて、善友とも成つ得るもの  
 成代りも悪友とも成つ得るものた。

夫れも拘らず知は、遊藝の理解が与つるとい  
 ると少し違ふが、ゆつ自身は遊藝と成つたものが  
 一歩遊藝と成つたを治と白服と成つて見る声の去来  
 と成つた。遊びニ成つて成つた成つたに成つた  
 覺えが成つた成つた成つた成つた成つた成つた  
 成つた成つた成つた成つた成つた成つた成つた

文藝春秋は

# 文部

るにせよ、  
大目に見てみた。一つは早くから小説と漢

文の、  
文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

文学界の中心として、  
文学界の中心として、

此の物語は...  
第...巻...  
...

5

...

返り答へた話の是の置けるい休島野と云ふて

るた。是の野中の地盤は雲水の台所の如くする

もの<sup>不意に</sup> ~~...~~ <sup>不意に</sup> ~~...~~

はく事が出来たホへにヤシ・ウラブと云ふた。

中取りて先は... ~~...~~

飛ぶんた、釋宗七代... ~~...~~

抱一が... ~~...~~

事... ~~...~~

た... ~~...~~

い... ~~...~~

鳥... ~~...~~

る... ~~...~~

と... ~~...~~

い... ~~...~~

く... ~~...~~

能... ~~...~~

過... ~~...~~

ち... ~~...~~

コ... ~~...~~

としに五月も六月も泊りてい事があつたが、

美品のく、時よきとも思ふはあつた。

面のはで、  
一文無しで、此の宿車と乗廻し、此の

手紙と積つて、  
此の宿車と乗廻し、此の

相渡が纏あつて金と取つたら、  
お鐵砲玉に互

つてうらたも、  
お鐵砲玉に互

らくして、  
お鐵砲玉に互

禮と、  
お鐵砲玉に互

或時、  
お鐵砲玉に互

り車袋と解はてらんちが、  
お鐵砲玉に互

わか、  
お鐵砲玉に互

塞がり、  
お鐵砲玉に互

た。  
お鐵砲玉に互

あつたが、  
お鐵砲玉に互

の地蔵、  
お鐵砲玉に互

普通の、  
お鐵砲玉に互

料の、  
お鐵砲玉に互

金するや、  
お鐵砲玉に互

い、  
お鐵砲玉に互



さつらちのて、徐々として樽姐枕衝の手振咄  
としつし、う新太、中ん吐さる、ヒと連なつて盛  
んに大橋博之鏡主の盛徳と語へた。

● 啼るを直ぐ ヒ ドワカへ欲ぢる行くへエ ヒ と  
えつた。飲んぶは石宿の研ひつしる、信

の手許も不如意たかうに格なきけりも置いと  
ゆけとリヤも百も兼知も若しんだやうな駈と

しつし、郷里つしりうか送なさんやさん  
かうをわたく鳥渡為路と認んである、帯うん

牛固でも買つておやくかぎしり、うヤ古拙  
ヤ大が、夫がう喜悦も翌日也翌々月も喜ゆは

か無つた。

夫は、が、ニ三日するも抱一の下宿オカメサ

<sup>子</sup> 母が尋ねて来た。腹ん祝うも、金業如流に如  
の許へ行くも ヒ つしお拙ケルや、マガ帯うん

フ、<sup>イ、エ、</sup> 作部直はかしのついでドウ  
でし、い、のてすが、お宿標は入らつし甲のよ

すしお手紙は号りよすし、ドウちすつためと  
日記でさうよさんので、お宿標へ廻らるゝと  
存じし、い、へエ、い、つ、左様で、直ぐ

16 33 相 国 風 園 集



大蔵経には

帰りて……と紙に懸すん大甲うた。

ドコへ行つてるか。ドコで沈没してゐる

か、夫も郷里へ隠れ寺と担かたか、そんな

事は一向知らしく今めらんから丸で問答

にし今のんが、夫かう言ふは鮫の道に

つた。

だが抱一は、初めの人と果てるツモりで

若羅ッ録を云ふのぢや無い。初めは下宿屋の

舟もするツモり、義理の悪い借金も解かす

ツモりに隠れを立く金葉とすうのだが、

と〜が退りきうきう入用にも振かかす

察であるし、暫らくじ〜して辛抱してゐ

たのだから金の度と見れば善い酒の一杯七飲

子たくするはえア眼と閉つてお辨しすけれ

は左るおい。吾の一杯がツイ二杯とろく三杯

とろれば下宿屋の執定きは三つてろく。支

人の都合などは問答で無い。根本金がモラ無

くろつてろく。抱一に限らず吾の友人の取

る金などは知れたもので、上午に危うし下午

に危うし無い。善口と問け途路に風が吹け

はインナ飛んでる。文人の絶頂的無畏さと  
 不学不修のアブク銭でハケ裂れる資本家の  
 みの<sup>長髪</sup>や、天引貯金で訓練される臍辯の消  
 費道徳で誇るるクダラシキこと。

だが、抱一のは自分一人の長髪が何れ  
 で世間と狭くして計る不義理とまねたり  
 するのど口無しの。根が小心を神経病のくさん  
 室座を自ら見せよう気取った風品と磨き、  
 脊豆はそれでも憚む大徳物と自分から進んで  
 脊豆でんでは苦業してやる。むし抱一はして

又わが室座を自ら見せようで無く、身にし  
 げんはるか世法としてやるワセリウチの快  
 氣もあるのだらうが、世間を知らるる若い者  
 に教して欲する<sup>男</sup>と云う過るるので終つたこと  
 ツキリが何のくるさう、人の為めの金の長髪  
 や秘蔵品の世法が去あると逃げ隠れして、  
 にしえらた通りおう抱一と云えらるるや、  
 にするた。

~~抱一~~の胃腸的食法

が、是はう、自分と泥と塗らうと、<sup>海</sup>

10 33 抱一 海

刺がそこを自分の勝手、門外はのうじをいふ  
 のはたまにふ世話だが、二地七三地七地か  
 らくううと叩いては、向う見ると大膽にうら  
 ぶ。狂子様はすくなく、おつ  
 犬が道と癖はす狂弁して出遭つたもの、とく  
 咬みつくると同じである。

成程、丁度お客の都合は、た処へ来た。初  
 蘇石の人の前でも憚りう、おれは由り困り話  
 と初め、おつたに、金と貸す人は、おつたへ  
 の、と借若無人にやり出した。

吾語に釣込、おつた、え、金が、おつた、おつた、  
 が、近頃内蔵の金と貸して、おつた、おつた、  
 た。Iと、おつた、おつた、二人が、おつた、  
 金社、おつた、おつた。

抱一は、おつた、おつた、おつた、  
 幾分、おつた、おつた、おつた、  
 は、おつた、おつた、おつた、  
 ん。

目、おつた、おつた、おつた、  
 七ん、おつた、おつた、おつた、  
 言、おつた、おつた、おつた、  
 言、おつた、おつた、おつた、

腹の中

別列

てるんごやうの。 ~~あんな~~ ~~心~~ 実答 ~~お~~

けし、 ~~あんな~~ 持の金と貸して ~~あんな~~ ちの ~~あんな~~

もん ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

休、 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

ふやア ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

空に ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

こで ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

句 ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~ ~~あんな~~

つこみたつて、Iは川と<sup>の</sup>家<sup>に</sup>こた<sup>へ</sup>て<sup>た</sup>  
た。

川<sup>の</sup>おのドコ<sup>に</sup>うた<sup>の</sup>、<sup>と</sup>抱<sup>一</sup>は執<sup>し</sup>脚<sup>く</sup>  
<sup>と</sup>同<sup>と</sup>お<sup>と</sup>う<sup>し</sup>した。<sup>が</sup>、<sup>知</sup>は<sup>面</sup>倒<sup>は</sup>い<sup>い</sup>  
う<sup>の</sup>ま<sup>ぐ</sup>ソコ<sup>に</sup>と<sup>う</sup>た<sup>は</sup>か<sup>う</sup>で<sup>話</sup>頭<sup>と</sup>持<sup>つ</sup>  
じて<sup>は</sup>う<sup>し</sup>した。

ドコ<sup>に</sup>う<sup>て</sup>す、I<sup>さん</sup>の<sup>お</sup>は<sup>い</sup>、<sup>と</sup>知<sup>が</sup>お<sup>お</sup>  
手<sup>に</sup>る<sup>う</sup>る<sup>の</sup>で、<sup>今</sup>度<sup>は</sup>I<sup>が</sup>言<sup>利</sup>と<sup>終</sup>て<sup>し</sup>  
る<sup>と</sup>話<sup>し</sup>た<sup>と</sup>言<sup>に</sup>併<sup>と</sup>何<sup>け</sup>てI<sup>の</sup>宿<sup>所</sup>と<sup>持</sup>り  
あ<sup>て</sup>う<sup>し</sup>した。<sup>が</sup>、<sup>知</sup>が<sup>教</sup>へ<sup>る</sup>底<sup>意</sup>と<sup>看</sup>る<sup>反</sup>

つこみたつてはぐうのした。

一<sup>緒</sup>に<sup>伴</sup>れ<sup>て</sup>つ<sup>て</sup>三<sup>人</sup>、<sup>の</sup>紹介<sup>する</sup>の<sup>が</sup>

登<sup>る</sup>う<sup>門</sup>前<sup>ま</sup>で<sup>案</sup>内<sup>し</sup>て<sup>三</sup>人、<sup>先</sup>輩<sup>が</sup>單<sup>独</sup>談<sup>話</sup>  
判<sup>する</sup>、<sup>と</sup>な<sup>ア</sup>に<sup>聞</sup>け<sup>ん</sup>、<sup>内</sup>禮<sup>も</sup>高<sup>さ</sup>さ<sup>る</sup>

ら<sup>ぶ</sup>、<sup>聞</sup>や<sup>せん</sup>、<sup>と</sup>、<sup>足</sup>信<sup>の</sup>口<sup>に</sup>執<sup>脚</sup>の<sup>抱</sup>

一<sup>は</sup>う<sup>ツ</sup>カ<sup>ナ</sup>茶<sup>お</sup>ず<sup>い</sup>ツ<sup>マ</sup>テ<sup>し</sup>追<sup>ん</sup>ち<sup>が</sup>、<sup>結</sup>  
る<sup>教</sup>へ<sup>て</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>い</sup>の<sup>で</sup>ブ<sup>ツ</sup>ウ<sup>サ</sup>ウ<sup>を</sup>な<sup>め</sup>る<sup>も</sup>

執意のて帰つた。

五<sup>の</sup>日<sup>に</sup>送<sup>ら</sup>と<sup>暮</sup>時<sup>同</sup>席<sup>し</sup>た<sup>左</sup>が<sup>あ</sup>し、<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>

日<sup>だ</sup>一<sup>は</sup>別<sup>送</sup>I<sup>の</sup>家<sup>と</sup>持<sup>し</sup>居<sup>る</sup>く<sup>尋</sup>ね<sup>た</sup>さ<sup>う</sup>

10 30 相馬屋

ら樟の加茂に安じらるるもんで無い。吹し  
 の由の骨も解らる見お知らずの男の柳  
 無。本職の意欲だつて突如飛江  
 無。又、ニんを無茶な金葉が洞外苦が  
 つてゐた。  
 本根をいさの脈と懸分ける異本を敏感とも持  
 つてゐた。  
 べつと四つたのたてうた。無茶、探し當て  
 ば根をいさの脈と懸分ける異本を敏感とも持  
 つかう神のこゝろ、三の町まで行別標札と調  
 で塚うまのちが、隠ん訊くも川合と川畔  
 が無い。どいしと探し當てらるの、不安  
 七喜也も不確からん  
 七喜也も不確からん

10 30 相馬産物

No. \_\_\_\_\_

文藝春秋は

だ、とらうた。  
 えつ、と物は服と解つた。どいしと探し當  
 てらるの、  
 Iの家は川合とえつて川畔で無い。川  
 合は五折町であるが、Iの家は折小川河で  
 こかま宮比町に接してゐる。距離からさうして  
 七折の家からいはい七丁で、最寄るえんは川合  
 ねでい無い。叱咄然と川合とちがで、  
 七喜也も不確からん  
 Iの名前、まじ、えん、  
 が無い。どいしと探し當てらるの、不安

文藝春秋は

何部

内蔵に言利と欲して居るかどうかドウの如く々が表面  
 は正気なシモト社の社員の家への縁材も  
 無くイキナリ飛込んで金を貸す所内の遊人  
 の花巻とくしと乱暴をやり口だ。送判不測は富  
 民だが、がくし此の~~新集本其讀~~に~~地味~~と利用  
 せんたに違ひない知は教唆者と誤解して居る  
 據る方なので、知は馬の登る日だの~~神~~神明亭  
 と強辯に~~お~~おけた。  
 イヤ面白い人で上と、Iは一白を~~留~~  
 める宗子と~~無~~無~~く~~く~~と~~として、~~東~~東~~地~~地一~~電~~電~~と~~と~~ら~~ら~~か~~か

名は~~おつ~~おつ~~し~~し~~た~~た  
 して~~あま~~あま~~と~~と~~平~~平~~ね~~ね~~る~~る~~と~~と~~金~~金~~と~~と~~焚~~焚~~し~~し~~て~~て~~言~~言~~わ~~わ~~ら~~ら~~ぬ~~ぬ  
 と突然としてめく面端つて、君は面白~~い~~い人  
 だ、神のこつ~~つ~~つ~~て~~て~~お~~お~~の~~の~~ま~~ま~~を~~を~~焚~~焚~~て~~て~~し~~し~~て~~て~~や~~や~~ら~~ら~~ぬ~~ぬ  
 に~~は~~は~~ま~~ま~~が~~が~~言~~言~~つ~~つ~~た~~た~~大~~大~~事~~事~~が~~が~~無~~無~~い~~い、一~~體~~體ト~~か~~か~~う~~う~~の~~の  
 家と~~聞~~聞~~り~~り~~し~~し~~ま~~ま~~ち~~ち~~と~~と~~訊~~訊~~く~~く~~と~~と、内田君の許でボ  
 ヤリ~~川~~川~~向~~向~~か~~か~~と~~と~~聞~~聞~~い~~い~~て~~て、坊と復つて一~~軒~~軒~~を~~を  
 門~~構~~構と見て~~お~~お~~な~~な~~ま~~ま~~を~~を~~た~~た~~と~~と~~し~~し~~て~~て。驚き~~や~~や~~し~~し~~た~~た~~す~~す  
 赤の~~熱~~熱~~心~~心~~に~~に。~~内~~内田君がヨモヤIは金を貸すの  
 と~~高~~高~~を~~を~~し~~し~~て~~て~~居~~居~~る~~る~~か~~か~~う~~う~~I~~I~~の~~の~~許~~許~~へ~~へ~~行~~行~~つ~~つ~~て~~て~~お~~お~~読~~読~~し~~し

No. \_\_\_\_\_





と謝して

叔母したのうも無しのは解りたも、如の  
 友人の一人が如の家で丁の字と知りて、~~丁~~突  
 撃したのうも丸きり素性が無い、~~丸~~えん  
 手い。且瘦さるも枯れも文壇で書きしる  
 一人でありて又如の文壇のふ巻の巻のりもあ  
 りてぶると律~~律~~。如は只管陳謝して、如一  
 の非常識と全く結びつけろので、~~如~~如癖の  
 帰して能面をつくるたが、その後丁に管~~管~~如  
 如一~~如~~如はドウしやした、面白い人です十と  
 云はれるちんびん開口した。(まだある)

(Blank grid area)